

その彼が約四十年間棲みなれた京大を辞したのは、五年まえ（WE 編集者による注：1965年）のことである。そのときの模様を、登山家で経営者の加藤泰安がつぎのように「聞き書き」している。

「大学の最後の退官講義を聞いた人の話では、退官講義というものは、たいがい長い過去の思い出を語る、しみりとしたものだが、彼の場合は徹頭徹尾これからやろうという計画ばかりであったらしい。それが普通の人なら一生かかってもやり切れないことばかりで、滅多に教室に出たことのない学生のなかには、就任講義と間違えて、来学期から先生の講義には必ず出ますとやってきたあわて者もいたそうだ」（「アルプ」八六号より）

草柳大蔵「実力者の条件——この人たちのエッセンス」、京風“類猿人”・今西錦司、（文春文庫、1985）